慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	八十年代の英国社会主義（二、完）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.6 (1921. 6) ,p.855(95)- 870(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210601-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

依りて之れを管理することを意味す」と言へるは、即ち驟てバルフオア氏の爲めに辯するものと言ひ得るであらう。蓋しトム・シヨウ氏は之に何等の例外をも認ぬからである。

次に又たスノオデン氏は社會主義を實現す可き實際的手段として、八時間勞働制成年勞働者に對する最低賃銀法、疾病の際に於ける完全なる補給、一切の兒童に對する小中學及び專門學校に於ける無料教育一切の老年者及廢疾者に對する十分なる給與勞働者の一般的標準を向上せしめんとする其他の政策等を列擧し、「間接稅を廢止して一切の公共的負擔を漸次に不勞所得の上に移し、斯くて終には全く不勞所得なきに至らしむること」を數え、更らに進みては餘剩價値の課稅に依りて失業者の救濟若くは支持を策し、賴つて以て勞働者が各自職を求めんとして競爭するの憂なからしむ可しと主張し、其目的に到達す可き手段として「社會主義者は國家が道路、港灣、水路の改良及び適當なる荒蕪地の殖林等の如き國富開發の計畫を實行せんことを要求する。而して又た勞働者の爲めに小農場を設け國有資本の助けを以て斯る國有農場の小作人間に共同組合的努力を奬勵するに依りて之を援助する政策を慫慂することを吾々に告げ都市は住宅の建設、火災保險、石炭の供給、牛乳の供給等の如き事業を經營し得可しとなし、「土地、鑛山、鐵道及其地の交通機の國有は社會主義に向つて數歩を進むる所以なる可し」と說くのである。

而してスノオデン氏は是等の綱領を實行する資金調達の困難は幾多の邦國に於て沒收に依らずして鐵道が國有に移され、電燈、瓦斯、市街鐵道等が市有に移されたるの事實を勘考すれば直ちに甚だ大ならざるを發見す可しと主張して居るが、之は道理に於ては誠に其通りである。何となれば國家は私人の手より企業の資本と負債とをとり之に對して國債證券を發行すれば買收は此處に完全に終了するからである。而して國家の負債は之に依つて著しく增加するに相違ないが、併し其は獲得せられたる企業の資本と負債とを完濟する爲めに增加せられたるに過ぎないから國家若くは都市が法外なる價を支拂ざる限りは、其國の富力及生產力に對する負擔は毫も增加せぬ道理となるが故である。併し夫れにも拘らず、過去の經驗より推して之を言へば、國家の產業管理は能率低くして兎角濫費に流れ易きが故に、其社會に致す所の勤務は良好なるを得ず、其が勞働者に與ふる所の待遇は必しも他に勝れりと謂ふ可からずして、而かも買收に起因せる負債の利子と償銷とに十分なる益金を收むる能はざる危險ありと主張せねばならぬのである。而して斯の如き場合に於ては、企業の國有は何れも負擔の增加であり所得の減少であると言はねばならぬのである。然れば管理の局に當る者が未だ十分に企業の經營を習熟せざるに早くも社會主義を實行せんとするは、總て希望の鄕土に至らんと欲して却つて經濟的破滅を招くものなりと言はねばならぬのである。知らず世人は果して、斯の如き冒險を爲すに甲斐ある業なりとなすや否やを。

八十年代の英國社會主義（二、完）

加田哲二

三

正統學派の經濟學說は J. S. Mill の經濟學原

論によつて集大成せられ、且つその中に、この學派に對する反逆の萠芽を見出すことを得ると並に英國の民衆と社會思想は Marx-Engels の第一インタアナショナルに對して、餘りに之に應呼することがなかつたことは既に前節において之を述べた。乍併英國の經濟學と社會思想とは段々社會主義的議論に有利な方向へ向つて來た。それは英國經濟學における歷史的研究の勃興であり、土地問題に對する論議と運動とである。本節並に次節において、是等兩現象について語り、英國の八十年代の社會主義が如何なる背景の下に復活せられたかを明かにしやうと思ふ。

J. K. Ingram 博士が「Ricardo 學說の初期における最も組織的な、徹底的な批評家」と云つた Richard Jones に就いては既に前節において少しく記するところがあつたが、彼は英國における歷史的研究の先驅者と云ふことが出來るのである。Jones はその著 Essay on the Distribution of Wealth and on the Sources of Taxation 1831 において、Ricardo の地代論に對して深刻なる批評を下してゐるが、そのことは扨て置き、彼の講學の精神は全く歷史的であつた。彼は King's College の講演において次のやうに云つてゐる。「若しも吾々が、地球上の種々なる國民がその收入を生產し、または分配する經濟と施設とを知らうとするならば、私はその研究に達するのには、唯だ一つの道しかないことを知つてゐる。さうしてそは觀察することである。」(Literary Remains. p. 569) また彼は一八三三年印度の學生に對する講演の中で、「眞に合理的な原理に到着するためには、吾々は事實を包括的に觀察しなければならない」さもなければ「普遍的原理」は何等の普遍性をも持ち得ないと云つてゐる。さうしてこの精神は、或る程度まで一八四七年に Edinburgh Review において公にされた Primitive Political Economy of England において見ることが出來るのである。彼はこの論文において、現在においても尙ほ價値のある記述をマーカンチリズムに對して爲した。

銀行家で、經濟雜誌 "Economist" の主筆であつた Walter Bagehot (1826-1877) はまた正統派經濟學に對して批判的態度を採つた人である。彼は英國金融市場とその特質を決定すべき事情に就いて廣汎な研究 (Lombard Street, 1873) を發表し、且つ特殊の貨幣問題に對して、數冊の小冊子を著はしてゐる。これ等の研究は彼の科學的研究心に加ふるに、その實際的經驗を以てしたもので、彼の得意の論題であつたのである。さうして更らに經濟學の原理に對しては、斯學に貢獻するところ頗ぶる多かつた重要な論文集 Economic Studies by the late Walter Bagehot edited by Richard Holt Hutton, 1880 がある。この書の目的は、經濟學の傳統的體系即ち Ricardo と J. S. Mill との經濟學體系がある根本的假定の上に立つてをり、そは普遍的の眞理でなく、たゞ限定せられた時と場所においてのみ實現せらるゝ原理なることを示すにあつた。即ち Ricardo 並に彼の學徒によつて樹立された經濟學原理は、あらゆる社會狀態に適用されるものではなくして、單に「商業が發達し、その發達の形態が英國におけるが如きものか、または之れと類似の形態を採れる社會狀態」にのみ適用されるものなることを證するにあつた。

Mill 並に Cairnes は既に經濟學が、「金儲の動物」と考へられてゐる「經濟人」と云ふ假想的の人間を取扱ふと云ふ意味において、假定的の

ものであることを教へた。然るに Bagehot は彼等以上に出てゐるのである。彼は是等の學者が云つて未だ足らない點、即ち「經濟人」なるものゝ活動の範圍は「極めて限定された狹いもの」であることを示したのである。即ち資本と勞働とが、その報酬の差別によつて、自由に一職業から他の職業に移り得らるゝが如き當時の發達せる營利經濟の世界に限定されるものであることを示した。

Bagehot は彼の經濟學を主として Ricardo の經濟學から修得したので、彼自身を呼ぶに「Mill 以前の最後の人」を以てし、Ricardo の經濟學を過大に評價したやうである。然し乍ら、彼は尙ほ歷史的研究方法に關する若干の知識を得てゐて、之を論駁すると云ふよりは、遙かに之に同情を表してゐた。彼は云つた「正しく考へるこそは（歷史的研究法）正當に解せられた抽象的研究法に反對するものではない」と。さうして、彼に依ると、是等の二つの研究法は各々異れる方面に對して適用し得るのである。即ち抽象的方法は、現在の發達した經濟生活の範圍に之を用ゐることが出來る。この範圍は極めて狹小ではあるが、尙ほ且つ興味多き方面である。然るに歷史的方法は、すべての人類の過去並に發達せる經濟生活以外の經濟現象に適用することが出來るのである。斯くの如く、歷史的方法の價値を認めてゐた Bagehot は、彼の賞賛して措かなかつた Ricardo が抽象的事象を宛かも現實の事實の如く取扱ふ傾向に對して盲目ではなかつた。Bagehot は Ricardo を評して次のやうに云つてゐる。「彼は假定的場合において假定的の人間の性質を考察してゐたときに、彼は、實際の場合に現實の人間性を考察してゐるやうに思つてゐた」と。（Economic Studies. p. 157）

斯樣に歷史的方法に正當な評價を與へた彼は、また社會科學における進化の概念を正當に認めた第一人者であつた。（この點に關しては彼は Sir Henry Maine に負ふところが頗ぶる多い。彼と Maine との關係は、獨逸の歷史派の經濟學者が Friedrich Carl von Savigny に對する關係の如きものである。）この事は彼の Physics and Politics, or Thoughts on the Application of the Principles of Natural Selection and Inheritance to Political Society, 1872. において、よく之を見ることが出來る。彼はこの書において前經濟時代から經濟時代への進化を說明したのである。

多くの點において Richard Jones の後繼者は、愛蘭の經濟學者 Edward Cliffe Leslie（1825?—1882）であつた。彼は King William's College, Isle of Man, Trinity College (Dublin) において教育を受けた。さうして彼は Trinity College において Sir Henry Maine の講義によつて多大の影響を受け、Maine が法律並に政治的方面において用ゐた歷史的研究法を經濟學に應用した。彼はまた August Comte の讀者であり、Wilhelm Roscher 並に Karl Knies の著作を通じて獨逸の歷史學派を知つてゐたのである。

Leslie の主著は次の二卷の論文集である。Land Systems and Industrial Economy of Ireland, England and Continental Countries, 1870. 並に Essays in Moral and Political Philosophy 1879（一八八八年の第二版は多少の增補をなして Essays in Political Economy と改題した。）がこれである。彼の經濟學に對する貢獻は價格、貴金屬の分配、農業問題、賃銀基金等の諸問題に及んでゐる。けれども Leslie の經濟學上における地位を確保したのは、彼の消極的の、破壞的の事業即ち經濟學における先驗的方法の駁擊にあつた。

彼は論じて云ふ。Ricardo は自然賃銀、利潤、價格の法則を論ずるときに、そが停滯的社會と進歩的社會との間にあつては、本質的の差異のあることを無視した。例へば、經濟學者が一の假定からの演繹推論を用ゆる代りに、事實をよく調べるときには、同一職業の間においても、賃銀の差異を發見し得るであらうと。さうして Leslie の見るところによれば、獨逸の歴史學派の見るところと同じく、人間は抽象的な經濟的動物ではなく、「彼は歴史と環境とによつて作られた、欲望あり、熱情あり、缺點ある生ける人間なのである。」

Leslie はまた從來の經濟學が階級的利益のために墮落したと云ふことを明かに論じた。Smith は富の進歩が如何に彼の教義の解釋を支配するかを豫見することが出來なかつたし、また彼の唱道した自由と正義と神の恩寵とに依る制度が、自利と特殊階級の偏見とによつて利己の制度に改變せられたかを豫知することが出來なかつた。さうして經濟學は「富の科學たる代りに、富のための科學たるに至つたのである。」この博大な心を持つてゐた經濟學者は、當時の經濟學者の功利主義に反對した。幸福は決して人生の最後の決定者ではない。教養ある人士が欲する所は、單に快樂を求めることではない。彼等は單に快樂を求めない許りでなく、時として人生の悲壯に多大の價値を認める。故に人生は單に幸福の追究者ではない。より以上の價値を持つてゐるものである。

かくの如く歴史的見地に立つてゐた彼はまた經濟學的法則の否定に傾いた。彼に對する經濟學の意義は、「特殊の歴史の結果である思索と教義との集合であつた。」故に「經濟學の根本法則は注意深き歸納法によつて得られたものでなければならない。二三の假定から演繹された非現實的の秩序と統一とは、最後の、または適當なる經濟學的法則と看做すことは出來ない。さうして事實は、經濟學者の不適當な推論ではなくして、經濟學者が、その一般的原理を推論し、之によつて常に彼の推論を立證すべき現象である」とした。かくて彼は正統派の經濟學研究法なる抽象的演繹法を斥け、經濟生活が一の進化によつて變化するものなることを立證し、自利心を中心とするその社會的、經濟的理想を斥けたのである。

Cliffe Leslie と多くの點においてその學説を同じくしてゐたものに、彼と同國人である John Kells Ingram (1824—1907) がある。彼は、Leslie と同じく Dublin の Trinity College における經濟學者であつた。彼の主著は The Present Position and Prospects of Political Economy, 1878. —と元と Encyclopedia Britanica に經濟學なる表題の下に公にされ、後に獨立の著書となつた A History of Political Economy とである。彼は正統學派の學説が、形式論理學や、抽象的非歴史的法理學や、先驗的倫理學、政治學と共に、そが餘りに個人主義的で、非道德的であることを非難し、經濟學の研究法は、その基礎を物理學並に生物學に置かなければならないとした。さうしてすべての人は富を欲し、力作を回避するとする正統學派の假定を捨て、「富の法則は富に關する事實から推論せらるべきであつて、人間の利己心と云ふ假定から推論せらるべきではない」とした。彼は斯くの如く明かに獨逸歴史學派とその學説を同じくするものであるが、彼は尚ほ近世最初の社會學者である August Comte の學説に深い親しみを感じてゐたのである。

英國經濟學の歴史的傾向を語るに際して、若

くしてこの世を去つた社會改良家 Arnold Toynbee (1852－1883) の名を逸することは出來ない。彼の思想はその遺稿として殘された Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England, Popular Addresses, Notes, and other Fragments by the Late Arnold Toynbee. 1884 において之を見ることが出來る。

彼は產業史を研究することに依つて、正統學派の學說の相對性を示し、Smith, Ricardo, Malthus の思想が、その時代と周圍との影響を深く蒙つてゐることを論じた。さうして彼は、民主々義の思想が正當なる富の分配の問題を論せしめるに至つたことを說き、經濟學者は、勞働者階級が競爭と私有財產制度の現狀の下において、その生活を改善向上せしめ得るやの問題に答へなければならないとした。Ricardo と Henry George とは之に對して否と答へた。然るに Toynbee は種々な統計的資料によつて、Ricardo の悲觀的論斷を駁擊し、さうして實質賃銀の昂騰を證明した。彼は Ricardo の利子の遞減的傾向論に對して、そは投資の範圍の擴大の可能性を無視するものであるとなした。要するに彼は Ricardo の地代、賃銀並に利潤の傾向に關する學說を否定したのである。

Toynbee は一八四六年以降の自由貿易、工場法、勞働組合、消費組合等の諸運動が賃銀の昂騰を助けることの多かつたことを論じて、現社會制度の下において勞働者階級の生活改善の可能なることを信じた。さうして斯くの如き社會改良の事業が道德的進步と、自助的精神と發達と、國有と公共住宅の制度によつて助長せらるゝことを信じた。斯樣な樂觀主義の彼は、また疑もなく、社會主義者ではなく私有財產を是認し、すべての收用と暴行とに反對する人であつた。

斯くの如き社會政策的論議は、多くの點において Ricardo の批評家であり、且つ主觀的價値論の創設者である William Stanley Jevons(1835—1882)においても、之を見出すことが出來る。彼は勞働者の向上、殊に既婚婦人の工場生活について研究した。(彼の論著は Methods of Social Reform(1883 に集錄されてゐる。)さうして彼はその The State in relation to Labour, 1882. において、最も明かに自由放任主義を斥けてゐる。彼は正しき經濟學の體系に到達せんとするならば、幾多の迷妄を含んでゐる Ricardo 學派の假定を全然排斥すべきであるとした。

英國における初期の歷史的研究法を採用した學者として James E. Thorold Rogers(1823-1890)を最後に揭げなければならない。彼は多くの點において正統學派の學統を引くものであるが、尙ほ統計的、歷史的研究において顯著な功績を表はしてゐる。その大著 History of Agriculture and Prices in England (1866-1882) はその統計的歷史的研究の成果である。彼は Cobden の影響の下に經濟學に入り、Bastiat の影響を受けてゐる。乍然、彼の講學の精神は全然歷史的研究法に基いてゐるものである。彼曰く「私は、斯くの如き歷史的研究によつて、多くの通俗の經濟學者が自然であると信じてゐるものが、人爲的のものであり、彼等が法則と呼んでゐるものが、躁急な、思慮なき、さうして不正確なる推論であり、彼等が論破し得ずとして得意でゐるものが、明かに誤謬であることを發見したのである……經濟學は二つの事柄から不信用になつた。その一は傳統的の事實に對する無關心であり、他の一はそが諸定義の間に苦しんでゐることである」と。(Economic Interpretation of

History. 1888. Preface.)

是等の諸學者の思想的內容には勿論差異があつた。然し乍ら彼等は殆んど全部正統學派の學派に對して批評的態度を採つた。さうして正統學派の覇權を破つたのである。保守主義者や極端なる資本主義者が、その論據とした正統學派の學說は、是等の學者によつて思想的覇權を奪取されたのである。かくて絕對的自由放任主義は排斥せられて、社會政策的思潮は勃興の機運に會した。英國社會主義が八十年代において復活する時の經濟學的思想は實に斯くの如きものであつた。思想の變遷は實際の變遷である。是等の社會政策的思想は必然に社會政策的運動に及んだのである。(Lewis H. Haney:—History of Economic Thought. Chap. XXIV. Concrete-Historical Criticism in England. Ingram:—A History of Political Eoncomy. Historical School in England. New Ed. pp. 216-229. M. Beer:—History of British Socialism. Vol. II. Chap. XII. § 3. The Assult on Orthodox Political Economy. pp. 231-237. Sidney Webb:—Socialism in England. Chap. VI. Socialism in Political Economy.)

四

I・W・M・A・の活動並に經濟學における新傾向との外に、六十年代並に七十年代において社會批評に活氣を呈せしめたものは土地改良論者の運動である。彼等は單にその論據を自然法に求めた許りでなく、その基礎に經濟學的論據を持つてゐた。

David Ricardo の價値論が科學的社會主義經濟學の出發點となつたやうに、彼の地代論は近世土地並に租稅改良論の基礎となつたのである。Ricardo によると地代は土地の原始的不可壞の力の使用に對して支拂はれる價格で、地味における差異、地位の便否、人口の增加、收穫遞減の法則の作用の四原因によつて起るものである。(Principles of Political Economy and Taxation. Chap. II) 從つて、地代は地主の勞力のために發生する所得ではなく單に天與の恩惠によつて得らるゝ所得である。斯くの如き地代論が、Locke, Spence, Ogilvie, Paine 等によつて唱道された自然法說と天賦人權說とに結合して、土地改良論者を生むことは極めて自然の成行たらざるを得ない。

この種の自然法說と天賦人權說とによつて起つた土地改良論に經濟學的基礎を與へたのは、J. S. Mill の不勞所得論である。彼がもし斯くの如き不勞所得論をこの經濟學原理の中で述べたとすれば、それが土地改良論者によつて利用さるべきことは甚だ自然である。何となれば一八四八年から一八八〇年に至るまでの期間においては、彼は實に Smith, Bentham, Ricardo が一七八〇年から一八四八年に至るまでの間に占めてゐた地位にゐたからである。彼は實に、自由放任主義から社會改良主義への過渡時代における哲學者であり、經濟學者である。然らば Mill の土地私有財產に關する學說は如何なるものであつたか。

彼の土地私有財產論は社會主義のそれに似てゐた。土地私有權は一の方便である、それは動產に對する所有權のやうに「神聖」なるものではない。何となれば、「何人も土地を作らず、それは全人類の原始的相續財產だからである。」(Principles book. II. Chap. 2. § 6) 故に地代は自然を獨占することによつて起り、從つてそは特殊の課稅の客體たるに適してゐる。彼は云つてゐる。「その所有者の側において何等の努力なく、また犧牲なくして、常に增加する傾向を持

つてゐる一種の所得がありとし、その所有者が社會において一の階級を構成し、彼等の完全なる消費的態度にも不拘、自然の事情が彼を益々富ましめると假定する。斯くの如き場合において、その所得が增加するに從つて、その全部または一部を國家が收用するとしても、そは私有財產の據つて立つてゐる原理の破壞とはならないだらう。そは何人から、何ものを奪ふのではない。そはたゞ、社會的事情によつて增加された富を、一特殊階級の不勞所得を增加する代りに、社會の利益のために用ゆるのである。恰度地代の場合はこれである。富を增加せしめる社會の通常の進步は、すべての場合において地主の所得を增加してゐる。……地主は、勞働せず、危險を冒さず、節約せず、宛かも睡眠の間において富んで行くのである。彼等は、一般の社會的正義の原理に基いて見ると、富の增加部分に對して何の要求權を持つてゐるか。」と。Principles book. V. Chap. 2. § 5)

Mill の經濟學原理出版の二年後スコットランドの社會改良家 Patrick E. Dove は土地改良策として土地單稅論を主張した。彼は論じて云ふ土地は人類の相續財產である。さうしてそは私有財產または分割所有とすべきではない、公有こそその正しき原理である。然るに一八四八年の事件は、人類が未だ共產主義に熱してゐないことを示した。然らば、私有と分割とが害惡であつて共產主義が未だ實行されないとしたならば、之に對する救治策は何であるか。Dove は之に答ふるに地代の國有を以てしてゐる。地代を國有することによつて、すべての他の租稅を廢する。何となれば、產業または勞働に對する課稅は單なる奪掠に過ぎない。そは勤勉者の財產の一部と自由とを奪ひ、かくて彼等の創意を弱めるに至るからである。然るに土地は何人によつても作られたものでなく、そは萬人の利益のために人類に與へられたもので、從つてそは適當なる課稅の資源である。さうして商業と工業とは課稅から脫かれるときに自由に發達し、かくて全國民の利益を增進する。かう Dove は考へたのである。(Science of Politics, 1850. Vol. I.)

Chartist 運動後における時代は一種の土地改良論の流行した時代であつた。最も極端なる個人主義者であると共に、最も極端な社會主義の反對者であつた Herbert Spencer さへも土地國有論の思潮以外に出ることが出來なかつた。Chartist 運動の鬪將 Bronterre O'Brien は一八六四年の彼の死に至るまで Reynolds's Newspaper にその土地改良論を揭げた。かくて一八七〇年には「土地所有權改良協會」Land Tenure Reform Association が J. S. Mill によつて設立せられ、最も有名なる自由主義の學者、政治家は多くの社會改良家並に勞働運動の指導者と共にこの會員となつた。この協會は土地より生ずる不勞所得を社會一般の利益のために使用し、全國民が土地の管理權を所有すべきことを要求した。かくて同種類の團體は續々と發生した。Land Law Réform Association, Land Nationalisation Society, English and Scottish League for the Taxation of Land Value 等がその主なるものである。

然るに一八七九年に至つて、Henry George はその Progress and Poverty を出版した。彼は社會改良家として多大の歡迎を受け、英米の社會は宛かも彼の著書を鶴首して待つてゐたかの觀があつた。彼の著書は英國においても非常な賣行を見せ、一八八二年には十萬部に上つた。そこで George は英國に來つて、アイルランドに宣傳

講演を試みたのである。彼は、イートンの教師でジャーナリストで後に「社會民主々義聯盟」に加入して Marx を通俗化し、革命的の詩歌を作つた J. L. Jones に伴はれた。當局はアイルランドの社會的不安と土地同盟の煽動を恐れ、彼等兩人を抑留した。けれども彼等は直ちに釋放され、George はロンドンに歸來し、數次の宣傳講演によつて全く人氣の中心點となつた。

George の書において吾々は、何等の新奇もその内に見出すことが出來ない。その主潮は天賦人權と Ricardo 並に Mill の地代論と Spence 並に Dove の土地改良計畫との綜合に過ぎなかつた。然し、その文章の妙は、直ちに社會改造の學說と計畫とを求めてゐた當時の人々の注意を惹くに至つたのである。彼は次のやうに論じてゐる。文明諸國において何處でも勞働はその正當なる賃銀を受けてゐない。さうして勞働は何處においても失業になやまされてゐる。その原因は何であるか。或る人は之を生產過剩に求め、或者は之を人口過剩に歸する。乍然是等の議論は共に正確なものではない。その眞の原因は、勞働と共にすべての富の源泉である土地の使用が萬人に自由でないからである。然るにこの富の源泉は少數によつて獨占されてゐる。すべての人は土地より富を作るべく勞働する。然かもその勞働の成果は、何等の勤勞を提供することのない地主の懷中に收まるのである。乍然、すべての人は、平等の權利を持つてこの世に生れて來た、彼は人生の缺くべからざる資源に對して平等なる權利を持つてゐるものである。然らば如何にして、人はこの自然の權利を回復することが出來るかの問題に逢着する。George は此の問題に對して二個の解答を提出した。一は新開國の場合であり、他は舊世界に對するものである。新開國においては、土地は萬人に屬すべきもので、すべての人に對して、彼の要するだけの土地を所有し、且つ之を耕作することを許す。もしも斯くの如くにして所有された土地が、特殊の利益を持つてゐるならば、その所有者は社會に地代を支拂はなければならない。さうして、その特殊の利益のある土地に對して所有希望者が多數に登る場合には、最高の地代を支拂ふものが、その所有者となる。舊國においては地代課稅が最良の策である。さうして他の產業並に勞働に對する課稅を廢止し、地代の課稅のみを存し置く、所有土地單稅の制度を設くべしと論じてゐる。斯くの如く土地に對しては社會主義的態度を採つてゐる George は社會主義の主張者ではない。彼は之を以て人間の至寶である自由の阻害者として、斥けるのである。

George の宣傳と時を同じくして Alfred Russel Wallace はその Land Nationalisation. 1882. を出版した。そは英國の勞働階級に對して、英人の「生得の權利」たる土地國有を實現すべく努力せんことを訴へ、かくすることが、彼等の慘狀を救ふ最良な方策であることを說いた。彼は土地の國家的管理を必要としたのである。彼の著は George のそれ程の人氣を惹くに至らなく、たゞ第二版まで出たに過ぎなかつた。

かくの如く土地改良の思想が浸滲し來るに從つて、當時の青年は之によつて深い感化を受け單に George の土地國有論を喜んだ許りでなく、之を批評擴張し來つて、遂に社會主義に到達するに至つたのである。

以上の如く、歷史的經濟學は社會科學に進化の要素の必要なることを敎へ、以て、資本主義を以て萬世不易なりとする謬想を正した。第一

インタアナショナルを支配したMarxの思想はHyndmanを通じて英國においてその基礎を下ろし、Henry Georgeの土地國有論は、之より出發したFabian Societyを生むことによつて英國特有の社會主義を生むことになつたのである。

附記、以上は單に八十年代英國社會主義復活の背景を語つたに止まつてゐるが、雜誌編輯の都合上、本論は之にて終りたることとし、八十年代の社會主義については更に稿を更めて讀者諸君に目見くるであらう。第四節は主として M. Beer:—op. cit. pp. 237-245. The Influence of Mill and the Land Reformers に材料を得、その他、Webb:—Socialism in England, Diehl:—Sozialismus, Kommunismus, und Anarchismus. IV Vorlesung. Der Agrarsozialismus. 小泉教授經濟學說と社會思想第二章等を參照した。）

（一九二一・五・九）

國家機能の二大分岐（三、完）

奥井復太郎

四

從來の議會組織がその社會的職務遂行に失敗しかくて生ぜる議會制度に對する幻滅の原因を究めんが爲めに現存の是等制度に加へられたるウェッブの批判は當然彼が提案せる改革の前提をなすものなり。即國家職務と認めらるゝに至りたる多種多樣の事務の整理は國家機關の改造を必要とするに至れり。ウェッブは國家職務を性質的に二大分別し之れに對して二個の特殊の國家機關を設立し此の二種の組織に國家職務を分擔せしめ以て國家の圓滑及び業績を計らんとするもの也。

『社會組織を完全に民主化す可く改革するに當りて國民的集會或は議會に關しては嚴密なる意味に於て政治的政府と云ふ可きものを社會的産業的管理の支配と區別し之れを斷然と分離せしむるは最も必要の事なべし。社會主義者の常套の口吻を用ふるならば人に對する政治は物の管理と差別せざる可からず。陸軍と海軍法律と刑罰更に帝王的獨裁權等と結合して殆ど離るゝ事なき吾人の國家觀念は民主的社會に於ては二部分に分割せらるゝを必要とす。吾人が國防國際關係及司法に關して政治的民主主義と稱するものは、社會の生活する手段たり機關たる産業並に勤務の國家的管掌を委托せらる可き吾人の呼んで社會的民主主義となすものより離別して存在する必要あり、前者の職務はVerwaltung又はautorité régalienne即治安的權力(Police power)後者の職務はWirtschaft又はgestion即經濟(housekeeping)なり。從て、來る可き共同的社會が有する所は唯だ一個の國民的集會に非ずして個々各自の職分を有せる二個の國會たる可く然も是等兩者は勿論後に述べらるゝが如く相互關係を有せざるものには非ざれ共同時に同等の獨立せる存在にして兩者については何等先後の關係ある事なし。吾人は下院(House of Commons)が分割せられてその權力職務に關して、一は刑法及び政治的主權他は經濟的社會的管理を司る二個の等格の國民議會となるの一事を以て單に現在の如き議會事務の充溢を救濟する有效なる療法なりと認むるのみならず又以て私的資本家を排除して漸次完成に向ひつつ社會が之に替らんとする根本的條件なりと認むるなり。』(A Constitution for The Socialist Commonwealth of Great Britain. PP. 110-1)

ウェッブによれば是等二種類の民主的國家機關は政治議會(Political Parliament)と社會議會